

小学校音楽科 器楽活動を支える演奏指導の研究

**京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 授業力高度化コース
126007 片山 侑美**

小学校音楽科 器楽活動を支える演奏指導の研究

片山侑美

授業力高度化コース

要約：現行小学校学習指導要領音楽編の目標にもある「音楽のよさや楽しさを感じながら意図をもって表現する」ことは基礎的な技能指導の上に成り立つことが先行研究の検討から明らかとなった。しかし、授業実践を通して小学校低学年の段階で既に大きな差があることを実感した。実践から見えてきた課題を生かすためにはどのような指導を心掛けるべきなのか。そこで研究の目的を「小学校音楽科器楽分野の授業において児童の技能を無理なく高められる指導方法を検討し、具体的なポイントを提案する」こととした。器楽分野における効果的な指導方法について文献調査や聴き取り調査の結果からまとめ、自身の授業実践と照らし合わせながら分析し考察した。

キーワード：小学校音楽 音楽教育 器楽 鍵盤ハーモニカ リコーダー

1. はじめに

筆者は教職専門実習（以下専門実習と表記する）で小学校音楽科における器楽分野の単元で授業実践をおこなった。これまでは器楽活動では「反復練習」をすることで児童の技能の向上を得ることが出来ると考えていたが、実践を通してそれだけではないことがわかってきた。

まず、専門実習Ⅰにおいては第2学年で鍵盤ハーモニカを使った授業実践をおこなう中で、小学校低学年の段階で児童にはすでに大きな技能の差があることを実感した。例えば、正しい運指や息使いができていないことが挙げられる。この段階での技能の差が生まれる原因として次の2点が考えられるであろう。

一つは、小学校入学前つまり就学前の段階で既に鍵盤ハーモニカの学習を始めている児童とそうでない児童との差があることである。

二点目は、第1学年における鍵盤ハーモニカの導入における授業で技能面における効果的な指導ができていない可能性である。

つまり児童たちの「練習不足」は器楽活動の技能習得にあまり影響しないのではないかと考えるようになったのである。筆者が行った授業展開では、既に児童にみられた大きな技能の差を埋めることは難しく、専門実習Ⅰにおける自身の課題として残った。

次に専門実習Ⅱにおいては、第3学年でソプラノリコーダー導入の授業実践を行うこととなった。ソプラノリコーダーは鍵盤ハーモニカとは違い、児童全員が初めて手にする楽器のため、学習開始段階での技能の差は見られない。

そこで鍵盤ハーモニカの授業実践で明らかとなった課題をソプラノリコーダーの指導に生かす

にはどのようにすべきなのか。また児童たちが生涯にわたって音楽を愛する心を育むためには、どのようなことに気をつけて指導を展開していけばよいのであろうか。自らが行ったソプラノリコーダー学習の授業実践を具体的に分析し、検証していきたいと思い、本テーマを設定した。

2-1. 研究の目的

本研究の目的は、音楽科器楽分野の授業において児童の技能を無理なく高められる指導方法を検討し、具体的なポイントを提案することである。

2-2. 研究の方法

2-2-1. 修了論文の構成

はじめに、指導要領および実践事例の検討を行いながら、小学校音楽科器楽分野が目指しているものや現状についてまとめた。次に専門実習Ⅰの授業実践における課題を分析する。そして明らかとなった課題が専門実習Ⅱソプラノリコーダー導入授業でどのように生かされていたかを検討する。最後に検討結果を基に研究成果を考察した。

2-2-2. 授業実践について

研究を行うにあたって、検討した授業実践の概要は以下の通りである。

専門実習は、M1時に秋に3週間、M2の春に2ヶ月間と同じ学校で行った。筆者の指導教諭は二回の実習とも同じ教諭であった。指導教諭は4～5年目の若手教員で学習規律を意識した学級経営を徹底していた。筆者は主に音楽科を担当し、専門実習Ⅰでは第2学年で鍵盤ハーモニカを使った器楽活動、専門実習Ⅱでは第3学年でソプラノリコーダー導入の授業をそれぞれ行った。

3-1. 調査結果 1

指導要領における小学校音楽科 器楽分野について

本章では、指導要領の検討を行いながら、小学校音楽科器楽分野が目指しているものや現状についてまとめる。

小学校における音楽教育の目標は

「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感情を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」ことであり、表現領域の中の器楽分野も目標に沿ったものとなっている。(青山・土居・角田2011)

指導要領の解説によると「音楽活動の基礎的な能力」を培うためには「直接的な音楽体験を通して身に付けるようにすることが大切である」と表記されていることから、楽器を使った器楽活動の重要性も伺える。

ここで学習目標の中で述べられている器楽分野における目標について述べたい。そこでは、器

楽分野の目標として次の四項目が挙げられている。

- (ア) 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。
- (イ) 楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏すること。
- (ウ) 身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて簡単なリズムや旋律を演奏すること。
- (エ) 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。

四項目から、教師が児童の基礎的な技能を高める指導を行うことの必要性がわかる。

しかし、平成元年の学習指導要領改訂から器楽活動において新たな文言が追加されているものの、平成10年の学習指導要領改定により、音楽科の大幅な年間授業時間の減少が続いている現状がある(菊池2010)。限られた授業時間の中で、目標を達成するためには、より効率的な指導方法の模索が余儀なくされているといえるのではないだろうか。では、実際にどのような指導方法を行うことで効率的に「音楽活動の基礎的な能力」を培うことができるのだろうか。

3-2. 調査結果2

本章では、文献調査の検討を行いながら、リコーダー学習に焦点を当てつつ、小学校音楽科器楽分野において効果的な指導方法について調査結果をまとめる。

効果的な指導方法を知るために、京都市小学校音楽研究会器楽部会、また京都市総合教育センター指導主事山崎弥生氏に協力を得て、現場で実践されている内容の中でもとりわけ効果を上げていることについて聞き取り調査を行った。

調査結果より、器楽分野における効果的な指導方法は前提条件が一つ、また効果的な指導の要素として四項目あると解釈し想定することにした。

前提条件：徹底したルール作り

- 1) 練習のスモールステップ化
- 2) 適切な視覚教材の使用
- 3) 「聴き合う活動」の確保
- 4) 器楽活動を楽しみと思える仕組み作り

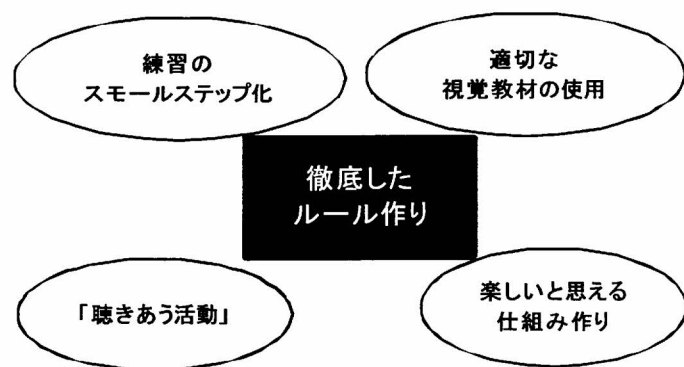


図1:効果的な指導方法

3-2-1. 徹底したルール作り

山崎氏によると、器楽分野の授業づくりの前提として意識しなければならないことは、学習規律を意識することであるという。その中でも、具体的には以下の二点に重きを置くことが重要である。

- i) 指示があるまで勝手に音を鳴らさないこと
- ii) 楽器を大切に扱うこと

i) に関して当たり前のことであるが、学級の児童一人ひとりが思い思いに所有している楽器を鳴らしてしまうと、授業が成り立たない。

ii) に関して教師が十分な指導をしないと、楽器の手入れを怠ったり、楽器を振り回したりしてしまう児童が出てくる可能性がある。そうならないためには、器楽活動をする前段階でしっかりルールを決め、徹底して守らせることが大切である。

3-2-2. 練習のスモールステップ化

京都市小学校音楽研究会で実践されていることの一つとして、新曲導入時の「練習のスモールステップ化」が挙げられる。これは、読譜から演奏へ間に複数の段階を取り入れるようにすることで、児童に無理なく技能を身に付けさせる指導法である。

スモールステップのモデル

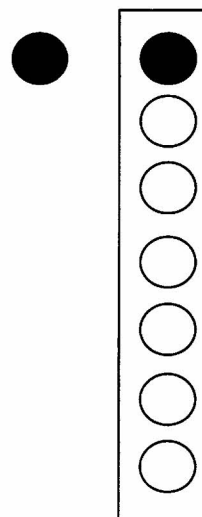
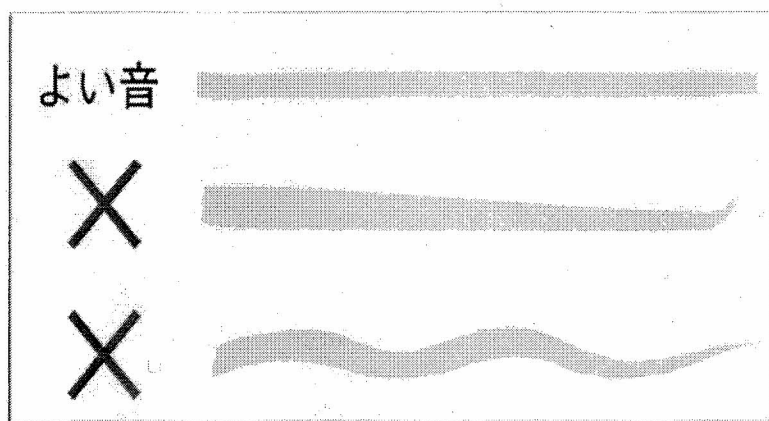
①読譜→②階名唱→③階名唱＋リズム打ち→④運指→⑤階名唱＋運指→⑥演奏

新曲導入時に、上のように少しずつ段階を踏んでいくことで、児童全員が到達段階に達しているかどうかを確認しながら器楽活動を進めることができる。こうすることで、無理なくスムーズに演奏できるようになる。

また、練習の順番を器楽学習の際、毎回取り入れパターン化しておくこともできる。練習の順番をパターン化しておくことでどのように練習を進めればよいのかを示す手立てとなり、児童自身で練習を進めることが可能となる。

3-2-3. 適切な視覚教材の使用

音楽科における視覚教材は児童の意欲を向上させる目的だけでなく、技能の向上を目的として導入することができる。



(図2 視覚資料：小長谷准教授から提供していただいたものを編集) (図3 視覚資料：教科書を参考に編集)

例えば、初めてソプラノリコーダーを扱う児童に焦点を当てた視覚教材を例に挙げる。

図2では初めリコーダーに息を入れる子どもたちがイメージしやすくなることを意図した視覚教材である。「まっすぐに息を入れて」と説明するだけでは、児童はなかなかイメージしにくい、実際に図2を目にすることで簡単にまっすぐの息を持続させることができると考えられる。

また、図3では教科書にも記載されていることがあるが、指使いを視覚的に表した教材を用いることで、児童は瞬時にどの場所に指を置けばよいのかの判断がつく。

以上のように、児童の伸ばしたい力を意識し、どの場面でどのようにして視覚教材を提示するのかを考え、効果的に用いることが大切である。

3-2-4. 「聴き合う活動」の確保

美しい音を聴き分ける耳を育てるためには「聴き合う活動」が大切であることはよくいわれている。器楽学習の成果の調査から「音の色（音の美しさ、個性、変化など）を聞き分ける音色に対する感覚」の習得に関して成果の度合いが低いことが指摘されている。つまり、美しい音とそうでない音の違いがわからない児童が増えている現状があるのだという。リコーダー演奏で美しい音を鳴らすためには、決められた運指で演奏するだけでなく、自らが工夫した技法が必要であり、そのためにはよく「聴く」ことが大切である。そのことからリコーダーをはじめとした器楽分野の学習には「聴き合う活動」が必要不可欠であるということがわかる。菊池（2010）

菊池（2010）が指摘するように、器楽活動の中で「聴き合う活動」によって児童たちが自身の音の質をよりよいものにしようとすることを実践を通して実感した。

また山崎氏によると器楽活動において「一音を大切にすることを心がけた授業」を形成していくことが何よりも大切であり、たとえ一音でもしっかりと「聴く姿勢」を児童たちに育むことが大切であるという。以上より器楽活動における授業で「聴く」時間は意識して取り入れることが大切であるといえる。

3-2-5. 器楽活動を楽しみと思える仕組み作り

器楽活動を行う上で、児童自身が器楽活動を楽しみと思うためには、授業の中に仕組みを作ることが大切であろう。例えば聴き覚えのある音楽を導入で流してみたり、実物を用いたりすることが挙げられる。また、ゲストティーチャーと呼ばれる器楽のプロを招いて生の演奏を耳にすることも効果的であると考えられる。様々な工夫を授業の中でちりばめ、児童が自然と「出したい音、目指したい音」を構築できるような仕組みが大切であると考えられる。

4. 専門実習Ⅰにおける授業実践と見えてきた課題

本章では、当該授業の概要について述べ、第5章で述べた四つの視点を踏まえた上で授業分析を行い、課題を述べる。

4-1. 専門実習Ⅰにおける授業の概要

教職専門実習Ⅰ

研究協力校	京都市立小学校
期間	2012年8月27日（月）～2012年9月13日（木）
配当学年・学級人数	第2学年 23名
科目	音楽科 器楽分野（鍵盤ハーモニカを使った新曲導入）
日時	2012年9月9日（木）
題材	「楽きの音色に気をつけて歌ったりえんそうしたりしよう」
教材	「こぎつね」
使用教科書	『教育芸術社 たのしいおんがく』

4-2. 専門実習Ⅰから見えてきた課題

第5章で述べた器楽分野における効果的な指導方法の四項目を焦点に置き、そこから見えてきた専門実習Ⅰの課題を項目に分けて述べていく。

器楽分野における効果的な指導方法の四項目を再度挙げておく。

- i) 徹底したルール作りの必要性
- ii) 練習のスモールステップ化
- iii) 適切な視覚教材の使用
- iv) 「聴き合う活動」の確保
- v) 器楽活動を楽しみと思える仕組み作り

これら4つの課題をどのように教職専門実習Ⅱにおける授業実践に生かされていたのかを分析していく。

i) 徹底したルール作りの必要性

規律を意識したルール作りが出来ていない。

表1. 専門実習Ⅰの授業 導入（平成24年9月9日京都市立小学校）

導入	学習の流れ	教師の指導援助
	・ <u>鍵盤ハーモニカの準備をする。</u> ・ 既習曲を歌唱する。 ・ 本時の学習の流れとめあてを知る。	・ 指使いに注意して演奏するよう促す。 ・ 歌唱の時は、肩幅に足を広げたり、視線を遠くに置いたりすることを意識させる声かけを行う。

課題：徹底したルール作り

専門実習Ⅰにおける導入では、第5章で述べた効果的な指導方法のうち1) 徹底したルール作りに関して課題が見られた。表でも指摘しているように、授業をスムーズに進行するための徹底したルール作りができておらず、いきなり楽器の準備を指示してしまった。そのため、楽器の準備ができた児童が思い思いに楽器を鳴らしてしまったことが課題である。

また、器楽活動の授業でありながら、既習曲の歌唱を最初の活動として入れてしまったことは、授業の目標に沿った活動ではなかったことも課題としてあげられる。

表2. 専門実習Ⅰの授業 展開Ⅰ（平成24年9月9日京都市立小学校）

展開	学習の流れ	教師の指導援助
Ⅰ	・ 階名唱をする。 ・ 指使いのみを練習する。 ・ <u>ペアの人と指使いを確認する。</u>	・ 区切りながら確実にできるよう支援する。 iv) 「聴き合う活動」の確保ができていない 運指を確認するだけで「聴き合う活動」を取り入れることができなかった。

課題：「聴き合う活動」の時間の確保ができていなかったこと

展開Ⅰでは、ペアになり指使いを確認しただけで、実際に音を出して「聴き合う活動」の時間を設定しなかった。そのため、楽譜通りの音を出して正しく演奏できているかに評価の重きを置いてしまい、音の美しさや表現の工夫にまで意識が届かなかった。音の正しさだけでなく、一音一音に意識を向け、丁寧に演奏することを心がけるような発問を取り入れるべきであったと思う。

表3. 専門実習Ⅰの授業 展開Ⅱ・まとめ（平成24年9月9日京都市立小学校）

展開	学習の流れ	教師の指導援助
Ⅱ	・ <u>指使いを実物投影機で示し、確認する。</u> iii) 適切な視覚教材を使うことができていない 運指と鍵盤がどう対応しているかを示すことができていない。	・ 指くぐりが必要な「ラファドラファ」の部分は難しいので何度も確認する。
	・ <u>階名唱しながら指使いの確認を行う。</u> ・ <u>区切りながら、鍵盤ハーモニカで演奏する</u>	ii) 練習のスモールステップ化ができていない この活動が抜けてしまったため、いきなり演奏する展開となってしまった。練習のスモールステップ化ができていない。 ・ 同じ旋律（反復）を意識して演奏できるよう促す。

ま と め	・ 楽器を片付け、次回の予定を示す。	評価規準：楽しんで楽器を演奏するとともに、友達と一緒に合わせたり聴き合ったりしようとしている。（演奏している時の様子から評価）
-------------	--------------------	---

課題 : 適切な視覚教材の使用

展開Ⅱでは実物投影機を使い、実際に楽器と教師の指使いを見せることで、運指を示そうと試みたが、手で鍵盤が隠れてしまい、運指と鍵盤の対応を示すことができなかった。そのため、児童は自分たちの弾きやすい指使いで演奏してしまうという課題が残った。

また、同じ単元の他の授業では、楽譜や教科書の拡大コピーを黒板に貼るという形で視覚教材を授業に使用した。しかし、児童が手元に持っている楽譜や教科書と同じ教材を提示しても、児童は自身の教材に目をやり、技能の習得にはつながらず、効果が得られていないのではないかと感じた。

課題 : 練習のスモールステップ化

展開Ⅱでは、指摘にもあるように「階名唱しながら指使いの確認を行う」という活動が抜けてしまい、読譜を行った後すぐに演奏へ移ってしまった。すると、殆どの児童が演奏することができなかった。その原因は、段階を踏んだ指導ができていなかったこと、つまり「練習のスモールステップ化ができていなかったこと」が原因として考えられる。

4-3. 課題の考察

専門実習Ⅰの課題を分析してみると、第3章で述べた効果的な指導方法の実践が行われていなかった。そのことが原因となり、新曲導入の授業であったが、殆どの児童が技能を身に付けられていない実態があった。また、児童の振り返りシートからは「難しかった」との感想が多くみられた。しかし曲が難しかったのではなく、効果的な指導を行えていなかったために、児童の技術を十分引き出すことができていなかったのではないかと分析できる。

5. 専門実習Ⅱにおける授業実践と見えてきた課題

本章では、当該授業の概要について述べ、第5章で述べた四つの視点、また専門実習Ⅰの課題を生かした授業ができていたのかを中心に検討する。

5-1. 専門実習Ⅱにおける授業の概要

教職専門実習Ⅱ

研究協力校 京都市立小学校
 期間 2013年4月8日（月）～2013年5月27日（金）
 配当学年・学級人数 第3学年 24名
 科目 音楽科 器楽分野（ソプラノリコーダーの導入）
 日時 2013年5月16日（木）
 題材 「きれいな音で、リコーダーをえんそうしよう。（こんにちはリコーダー）」
 教材 「ピタゴラスイッチのテーマ曲」
 使用教科書 『教育芸術社 たのしいおんがく』

V) 器楽活動を楽しみと思える仕組み作り

NHK 教育テレビ「ピタゴラスイッチ」のテーマ曲は児童全員が聴いたことのある曲であり、とてもうれしそうに聴いていた。

表4. 専門実習Ⅱの授業 導入（平成25年5月14日京都市立小学校）

導入	学習の流れ	教師の指導援助
	・ <u>ピタゴラスイッチの曲を聴く。</u> ・ 本時の学習の流れとめあてを知る。	・ 聴いたことのあるリコーダー曲「ピタゴラスイッチのオープニングテーマ曲」を聴くことで、これからリコーダーを学習していこうとする意欲をもてるようにする。
	本時の目標：リコーダーのひみつをさぐるう	

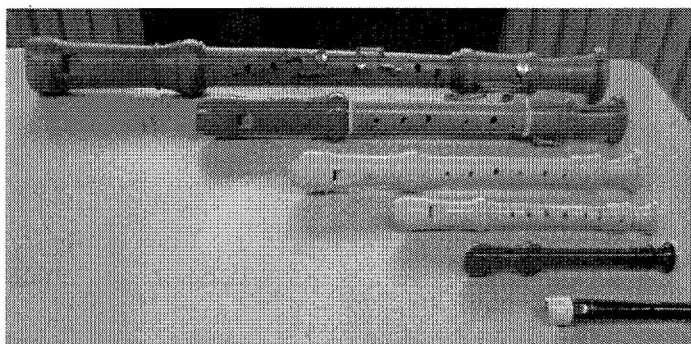


導入では、NHK 教育テレビ「ピタゴラスイッチのテーマ曲」を鑑賞する時間を取り入れた。よく耳にする音楽がリコーダーで演奏されているということを知った児童たちは「これ、リコーダーの曲なの？」と問いかけたり、聴き入るようにしている姿があったりした。これから学習するリコーダーに対しての興味関心を引き出すことができたように思う。

（図4：「ピタゴラスイッチのテーマ曲」）

表 5. 専門実習Ⅱの授業 展開Ⅰ（平成 25 年 5 月 14 日京都市立小学校）

展 開 Ⅰ	学習の流れ	教師の指導援助
	・ リコーダーが生まれた歴史を知る。	・ リコーダーと小鳥の鳴き声の関係や、リコーダーが 14 世紀後半から親しまれてきたことを示すことで、リコーダーに関心をもてるようにする。
	iii) 適切な視覚教材の使用 実際にソプラノ以外の種類のリコーダーを用意することで、視覚教材を使った学習意欲を促している。 ・ リコーダーの兄弟（なかま）について知る。 ・ 5 種類のリコーダーの音色を聴き、5 種類のリコーダーが使われている曲を鑑賞する。 ・ タンギングと息遣いの練習をする。 ・ <u>リコーダーを扱う時の約束事を確認する。</u>	・ <u>ソプラニーノ、ソプラノ、アルト、テノール、バス 5 種類のリコーダーを用意することで、リコーダーのもつ音色を感じ、自分たちも吹いてみたいと主体的にリコーダーを学習しようとする意欲をもてるようにする。</u> ・ 「ワン トゥー スリー」を発音させることで、自然と「トゥ」を発音するときの口で発音できるようにする。 ・ 右利き、左利きに関わらず、左手を上にすることを指示することで、間違いなく構えられるようにする。
	i) 徹底したルール作り 楽器を配布する前にルール作りを徹底することで、今後、学習規律を意識したリコーダー学習ができるようにした。	



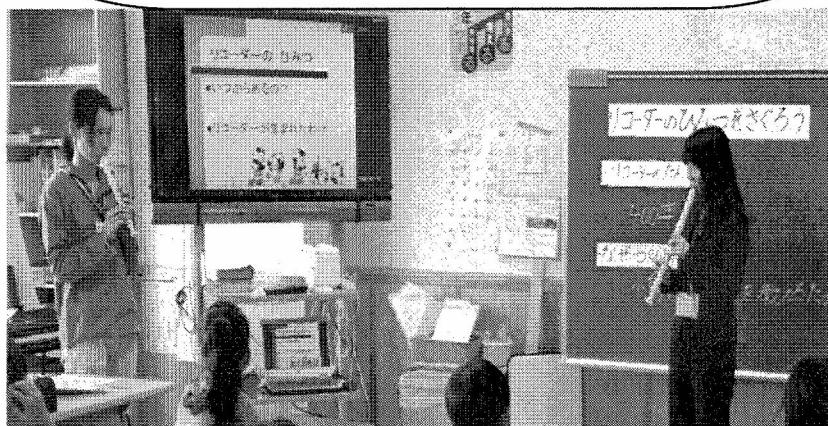
（図 5：色々な種類のリコーダー：小長谷准教授から提供）

展開Ⅰでは、実物を使った工夫を行うことで、器楽活動を楽しみと思える仕組み作りを行った。ソプラノ以外の 5 種類のリコーダーがあることを示し「リコーダーの兄弟」と定義した。児童たちは「どんな音がするのか聴いてみたい」と口々に声にしていたことが印象に残っている。

表6. 専門実習Ⅱの授業 展開Ⅱ・まとめ（平成25年5月14日京都市立小学校）

展 開 Ⅱ	学習の流れ	教師の指導援助
	・ <u>リコーダーを实际手に取り、穴のふさぎ方、構え方、を知る。</u>	評価規準：リコーダーの音色に興味・関心をもち、鑑賞する学習に進んで取り組もうとしている。（ふりかえりシートから評価）
	iii) 練習のスモールステップ化 楽器を鳴らすまでの段階をスモールステップ化し、段階を経てリコーダーに慣れ親しむことができるよう配慮している。	
ま と め	・ <u>穴を全て開けたまま、リコーダーを構えて音を出す。</u> ・ リレー奏を行う。 ・ 振り返りを行う。	iv) 「聴き合う時間」の確保 一つの音だけではあるが、何度も音を鳴らすことで他の児童との音の違いを比べる活動を取り入れた。またリレー奏をして、一音を丁寧に出すことの大切さを体感できるように促した。

展開Ⅱでは、一人ずつ楽器を配り、穴のふさぎ方、息の入れ方などを指導した。一つひとつ確認しながら進めることで、全体に差ができないよう配慮した。また、穴を全てあけたままではあるが、音をつなげていくリレー奏を行うことで、一つの音を丁寧に出す姿勢を養えるように配慮した。また、楽器を配る前に、普段学級担任の教員と共に二種類の楽器を使って二重奏を行った。



（図6：T1・T2による範奏）

5-2. 考察

専門実習Ⅱの授業実践を分析してみると、第3章で述べた効果的な指導方法として挙げた1つの前提と4つの要素が随所に見られる。また一つひとつの活動が「楽しい」と思えるようにテンポを崩さないようにすることを心がけた。最初に前提である「徹底したルール作り」をしっかり行うことや、視覚・聴覚を刺激する活動を展開することを意識した授業づくりとなっていた。また聴いたことのある「ピタゴラスイッチのテーマ曲」がリコーダー曲であるということを示すことで親近感を湧かせた一方で、児童たちが目にしたことのない様々な種類のリコーダーを用意することでリコーダーという楽器そのものの奥深さを感じ取らせることに繋がったのではないかと思う。

6.研究の成果と今後の課題

研究の成果としては、自らが行った授業実践の分析を通して、児童の技能を無理なく高められる指導方法の考察をし、一つの前提条件と四つの要素を具体的に提案したことが挙げられる。特に指導を行う前提条件として取り上げた「徹底したルール作り」において、学級の児童それぞれが一つずつ楽器を使う器楽活動であるからこそ、学習規律をしっかり整え、楽器の扱い方を徹底することが器楽活動を行う上で大切だということがわかった。しかし、効果的な指導を行うことにとられすぎて児童の技能面ばかりを重視するのではなく、音楽を楽しもうとする心を教師自身がもち続けることの必要性も改めて実感した。

今後の課題としては小学校高学年で目標としている技能を見据えた効率的な指導方法の分析が挙げられる。本研究では実践を行った小学校低・中学年の器楽分野を中心に内容を構成しているため、最終的に小学校卒業段階で身に付けたい技能を見据えた指導方法の提案ができなかった。小学校では学年が上がるにつれて内容や取り扱う曲のレベルは、より高度化する。器楽分野の導入期で基礎を身に付けた後さらに高い技能を身に付けるためには、今回提案した指導方法だけでは対応できないであろう。そこで、小学校全学年を通した器楽分野の事例の分析を重ね、指導方法を検討することを今後の課題としていきたい。

謝辞

最後になりましたがこの場をお借りして、様々な形でご指導くださいました先生方をはじめ調査に協力してくださった方々、執筆中ささえてくださったすべての方々に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 青山夕夏・土居祐二郎・角田佳奈 (2011)「小学校音楽科における器楽学習の問題点 - 鍵盤ハーモニカとリコーダー学習を中心に - 」『香川大学教育実践総合研究』23号 115 - 124 頁
- 2) 菊池誠子 (2010)「小学校におけるリコーダー指導について - 新学習指導要領 (平成 20 年改訂) との関連から」『児童教育学会研究収録』21号 55 - 70 頁
- 3) 京都市音楽教育研究会 指導用資料 (2012)
- 4) 小学校学習指導要領解説 音楽編 (2008)
- 5) 宮部和男 (2005)「小学校におけるリコーダー指導のあり方 - 導入期の指導を中心に - 」『岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要』5号 81 - 90 頁
- 6) 山中和佳子・庭田光晴 (2012)「小学校第3 学年におけるリコーダーとの出会いの指導と教育評価 - 子どもたちにとって楽しく愛着のある楽器になることを目指して - 」『日本音楽教育学会音楽教育実践ジャーナル』10 巻 1 号 23 - 31 頁